

社会的態度の構造に関する因子分析的研究*

— 性_T差について —

田 中 国 夫

1. 目 的

われわれは1949年から1950年にかけて、日本の大学生について全国の主な大学から被験者を抽出し、それらの学生のもつ社会的態度とその因子的構造を明らかにした。⁸⁾ 本報告はそれ以来10年を経た1960年における同様の実態をみようとするものである。両者の比較については用いた尺度のちがいや、整理のしかたの差異、(1949年調査では、男女合計の集計であったのに対し、1960年調査で

第1表 被調査者の内訳

	男	女	計
1 北海道学芸大	25	24	49
2 東北大学	37	11	48
3 日本大学	21	27	48
4 法政大学	41	2	43
5 千葉大学	33	17	50
6 愛知学芸大	33	0	33
7 金城学院大	0	16	16
8 京都大学	15	32	47
9 立命館大学	34	8	42
10 大阪府立大学	50	0	50
11 大阪厚生学院	0	41	41
12 神戸大学	20	19	39
13 広島大学	40	10	50
14 島根大学	19	30	49
15 松山商大	45	5	50
16 徳島大学	29	21	50
17 福岡学芸大学	22	29	51
18 鹿児島大学	21	15	36
計	485	307	792

は、男女別々の集計) のため完全な比較はできないが、この点を勘案した上で、あの程度の考察を加えてみたい。

この研究の主な目的は、青年学生における社会的態度の因子構造に関して男性、女性の性差がどれほどあるかをみようとするものである。われわれは前に因子分析のQテクニックを用いて男女学生の類型的因子のちがいを明らかにしたが、⁹⁾ Rテクニックを用いた研究はまだ行っていない。わが国においてこの種の研究はまだ見当たらない。外国では Diggory, J.C. の貴重な研究がある。Diggory はアメリカの学生の場合、女性の方が態度の構造に関して一貫性があると報告しているが、わが国の場合は果してどうか、この点を明らかにしよう

第2表 計算の基準とした態度の方向性

態度変数	方 向 性
1 中 共 人	unf. ~ fav.
2 キリスト教	fav. ~ unf.
3 スポーツ	unf. ~ fav.
4 アメリカ人	unf. ~ fav.
5 映画	fav. ~ unf.
6 共産主義	fav. ~ unf.
7 ソ連	unf. ~ fav.
8 韓 国 人	unf. ~ fav.
9 戦争	fav. ~ unf.
10 男女交際	fav. ~ unf.
11 中 共	unf. ~ fav.
12 ア メ リ カ	unf. ~ fav.
13 文 学	fav. ~ unf.
14 軍 備	unf. ~ fav.
15 天 皇	unf. ~ fav.
16 愛 国 心	unf. ~ fav.
17 革 命	unf. ~ fav.
18 親	fav. ~ unf.

* 本研究は昭和36年度文部省科学研究費による「社会的態度の変容に関する逐年的研究」の報告の一部である。

とするのがこの研究の主目的である。

2. 手 続

18種の態度尺度を用いて測定が行われた。これらの各尺度は3つのカテゴリーから選ばれている。1つは人種の態度をみようとするものでアメリカ人、ソ連人、中国人、韓国人である。第2は政治問題に対する態度を明らかにするもので、ソ連、中共、天皇、軍備、愛国心、戦争、共産主義、革命、などである。第3は社会問題に対する態度をみようとするもので、文学、映画、親、スポーツ、男女交際、キリスト教、が用いられた。このうち、文学、天皇、親、愛国心、軍備、革命は1960年調査の際、改めて追加された尺度であり、それ以外の尺度は1949年調査に使用したものをそのまま使っている。天皇、愛国心、軍備、革命は北海道学芸大学で作成したものであり³⁾、文学は佐野⁶⁾、親は松山⁵⁾が作ったものである。

被調査者は第1表の通り、男485名、女307名、計792名である。ちなみに1949年調査の被験者は男大学生385名、女子学生396名、計781名であった。

調査の実施期間は1960年6月から9月にわたっている。

相関係数は各人の尺度値をTスコアにきりかえ

たものを用いて計出した。なお、相関係数は第2表に示すような態度の方向性で計算した。ここでは態度の方向性が1つの基準でそろえられなかった。方向性欄の左側が進歩主義的態度になっているものもあれば、保守主義的な内容になっているものもある。こうした操作のもとに算出された相関係数が第3表(男子)第4表(女子)である。

男女それぞれの相関行列をThurstoneの重心法で因子分析した結果の因子行列が第5、6表である。本研究では試みに第1因子と第2因子について軸の回転を行い、その操作が因子の解釈をより容易にするかどうかを吟味してみた。

まず、因子行列を示す第5、6表から気づくことはその第1因子が双極性を示していない点である。この研究では相関係数を算出するときに、その方向性を意図的に、急進-保守の方向にそろえなかったから、例えば、6. pro- 共産主義と、7. anti- ソ連などは当然、第1因子から双極性を示すものと予想していた。それにも拘らず、それらがすべて正のsaturationを示したのである。男女とも例外なくこうした傾向を示した事実をなんと解釈すればよいだろう。共産主義に賛成、天皇はもちろんのこと、軍備にも反対という態度がもし、強いイデオロギーによって位置づけられていたならば、普通には、ソ連、中共への好意的態

第3表 相 関 行 列 (男子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1																	
2	.117																
3	-.006	.013															
4	.127	.049	.032														
5	.028	.055	.042	-.041													
6	-.189	.039	.024	.184	.152												
7	.161	.102	.047	-.058	-.122	-.222											
8	.319	.070	.102	.056	-.010	-.045	.219										
9	.104	.153	.066	-.005	.072	-.027	.258	.259									
10	-.003	.025	-.117	.181	.029	.062	.120	.051	.118								
11	.121	.085	.061	.049	-.057	.010	.274	.259	.243	.044							
12	-.053	.098	.028	.151	.008	.308	.054	.088	.079	.027	.220						
13	.063	.004	-.064	-.001	.046	.009	.118	.128	.206	.294	.068	.162					
14	.031	.086	.027	.139	.065	.240	.210	.076	.137	.144	.067	.200	.381				
15	-.006	.017	.064	.009	.026	.104	.000	.108	.155	.172	.156	.278	.282	.379			
16	.033	.072	.008	.076	.012	.019	.090	.113	.102	.104	.091	.087	.170	.265	.176		
17	.144	.075	-.035	.013	.017	.324	.202	.122	.203	.063	.148	.022	.124	.074	.066	.341	
18	.053	.024	-.055	.058	.006	-.102	.144	.095	.383	.089	.066	-.018	.141	.173	.066	.446	.385

第4表 相関行列 (女子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1																	
2	.143																
3	.052	.070															
4	.040	.168	.187														
5	.061	.184	.054	.148													
6	-.079	-.006	.041	-.015	-.111												
7	.177	.012	-.054	.005	-.110	.028											
8	.224	.114	.031	.114	.074	.208	.295										
9	.055	-.001	.026	-.029	.047	.187	.216	.190									
10	.064	.069	-.008	-.014	.156	.072	.021	-.065	-.086								
11	.026	.129	.049	.062	.015	.091	.089	.195	.152	-.088							
12	-.034	-.003	.056	.161	.114	.173	.115	.146	.143	.091	.146						
13	.053	-.002	-.064	-.020	-.009	.132	-.020	.042	.165	.057	-.003	.207					
14	.028	.001	-.052	-.059	-.050	.188	.050	.087	.161	.010	.080	.309	.381				
15	.066	.018	.072	.104	.252	.097	.090	.206	.213	.020	.076	.234	.337	.402			
16	-.018	.013	.022	-.032	.131	.314	.028	.091	.182	.132	.035	.382	.243	.463	.254		
17	.086	.097	.017	-.078	-.057	.115	-.025	.086	.175	.042	.266	.006	.104	.156	-.004	.335	
18	-.092	-.030	-.086	-.060	-.041	.194	.053	.047	.068	.101	.019	.054	-.025	-.010	-.070	.468	.252

第5表 因子行列 (未回転及び回転因子) — 男子 —

attitude variables	Unrotated Factor					h_2	Rotated Factor	
	I	II	III	IV			I'	II'
1 anti- 中 共 人	.231	.274	.110	-.152	.1635		-.121	.337
2 pro- キリスト教	.210	.067	.040	.095	.0591		.047	.216
3 anti- ス ポ ー ツ	.060	.060	.127	.165	.0505		-.022	.082
4 anti- アメリカ人	.204	-.143	-.108	-.105	.0846		.226	.105
5 pro- 映 画	.081	-.114	-.063	.127	.0394		.145	.013
6 pro- 共 産 主 義	.206	-.423	-.302	.435	.5017		.469	-.034
7 anti- ソ 連	.318	.364	.272	-.134	.3253		-.156	.457
8 anti- 韓 国	.395	.275	.234	-.055	.2893		-.040	.480
9 pro- 戦 争	.491	.247	.081	.101	.3187		.032	.549
10 pro- 男 女 交 際	.288	-.225	-.080	-.270	.2128		.339	.136
11 anti- 中 共	.370	.182	.231	.169	.2518		.027	.411
12 anti- ア メ リ カ	.347	-.291	.154	.242	.2872		.426	.155
13 pro- 文 学	.427	-.231	.120	.252	.3135		.414	.254
14 anti- 軍 備	.522	-.317	.103	-.190	.4195		.536	.293
15 anti- 天 皇	.413	-.280	.196	.034	.2884		.449	.218
16 anti- 愛 国 心	.450	.108	-.320	-.154	.3402		.131	.444
17 anti- 革 命	.454	.221	-.445	.149	.4751		.036	.504
18 pro- 親	.407	.288	-.349	-.170	.3992		-.045	.496
ΣF^2	2.2292	1.1087	0.8406	0.6425				
%	12.38	6.16	4.67	3.60	26.81			

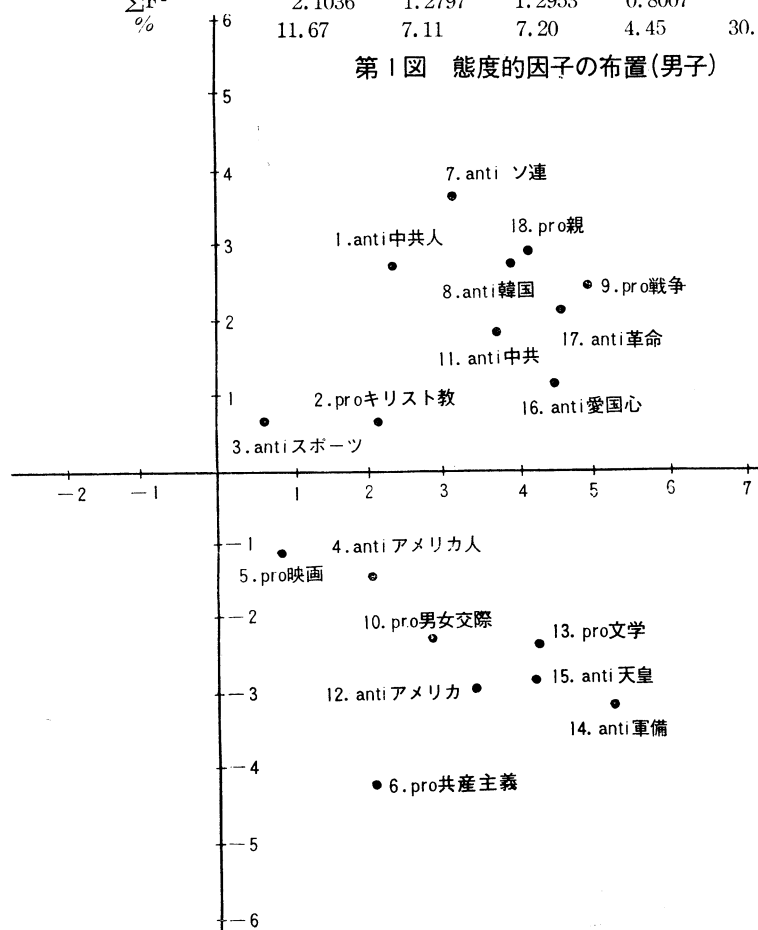
度となって現われるだろうし、戦争には強い反対の態度を示すだろう。ところが、第1因子においては、共産主義への賛成、天皇への否定という進歩主義的態度が、ソ連、中共への否定的態度、戦争への賛成と共存していたのである。この態度構

造はどうみても、強固なイデオロギーにもとづいた認識からだけのもと思えない。結局、男女学生とも、その社会的態度の根底に、イデオロギー的認識をもっていないというのがわれわれの推定する第1の結論である。

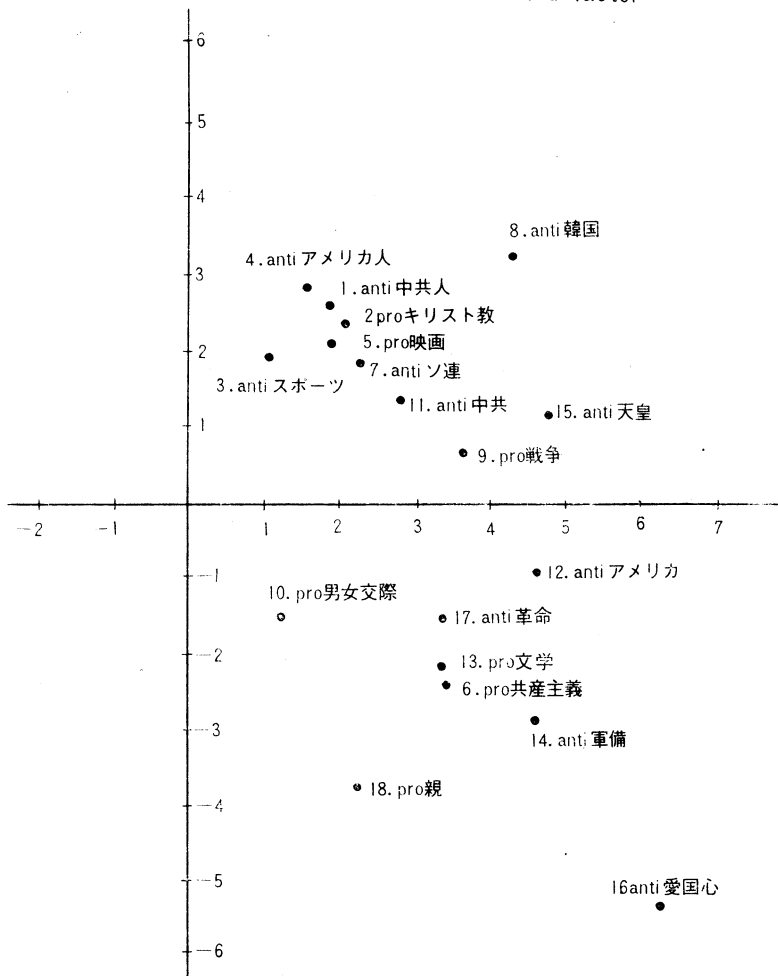
第6表 因子行列 (未回転及び回転因子) — 女子 —

attitude variables	Unrotated Factor				h_2	Rotated Factor	
	I	II	III	IV		I'	II'
1 anti- 中 共 人	.191	.265	-.072	-.031	.1126	-.133	.298
2 pro- キリスト教	.206	.233	-.058	.262	.1685	-.099	.295
3 anti- ス ポ ー ツ	.106	.191	.117	.160	.0868	-.112	.188
4 anti- アメリカ人	.154	.285	.194	.179	.1745	-.170	.276
5 pro- 映 画	.197	.215	.318	.296	.2737	-.087	.279
6 pro- 共産主義	.346	-.231	-.138	-.078	.3724	.373	.184
7 anti- ソ 連	.225	.194	-.252	-.295	.2387	-.056	.292
8 anti- 韓 国	.424	.323	-.253	-.202	.3888	-.068	.529
9 pro- 戦 争	.370	.063	-.155	-.205	.2068	.130	.352
10 pro- 男女交際	.122	-.144	.082	.157	.0668	.186	.320
11 anti- 中 共	.286	.144	-.239	.053	.1623	.018	.320
12 anti- ア メ リ カ	.477	.094	.266	-.036	.2885	.320	.366
13 pro- 文 学	.349	-.210	.200	.284	.2865	.357	.197
14 anti- 軍 備	.464	-.281	.210	-.317	.4386	.475	.261
15 anti- 天 皇	.486	.107	.367	-.238	.4387	.150	.475
16 anti- 愛 国 心	.625	-.530	.062	.150	.6978	.772	.276
17 anti- 革 命	.340	-.155	-.314	.229	.2905	.304	.216
18 pro- 親	.233	-.377	-.287	.263	.3477	.443	.013
ΣF^2	2.1036	1.2797	1.2953	0.8007			
%	11.67	7.11	7.20	4.45	30.45		

第1図 態度的因子の布置(男子) —unrotated factor—



第2図 態度的因子の布置(女子) —unrotated factor—



次は双極性を示した第2因子の解釈に移ろう。

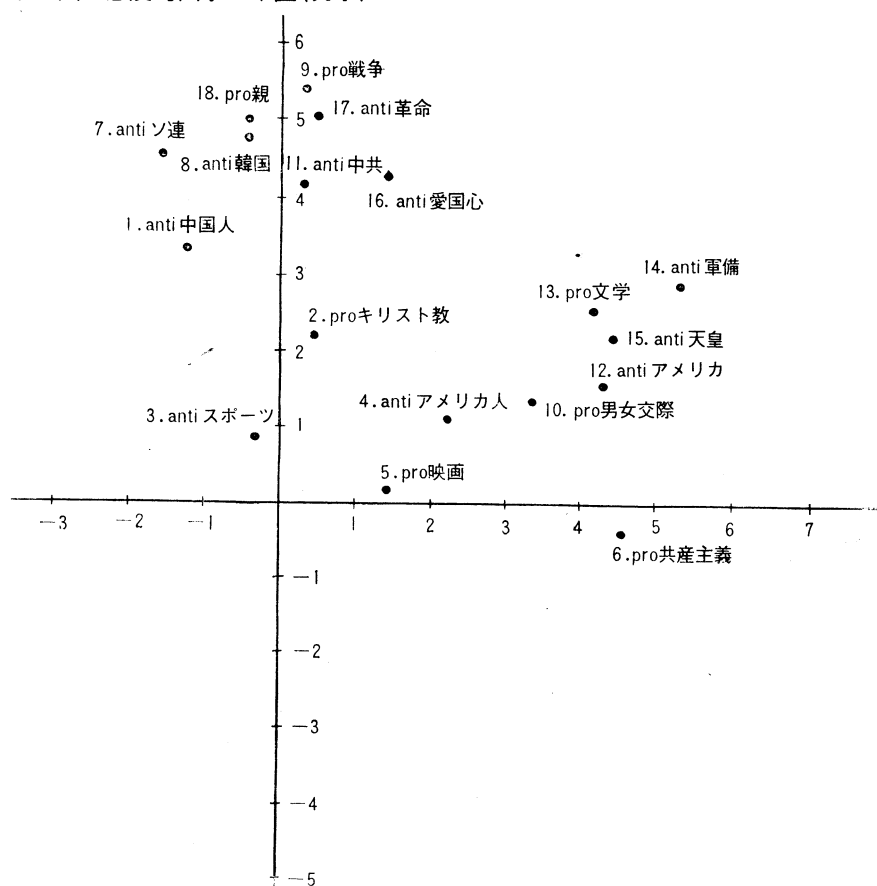
これらの因子の心理学的解釈を容易にするために第1, 第2, 両因子を直交座標軸上にプロットする。まず, 未回転の重心因子について考えてみよう。(男子…第1図, 女子…第2図)

男子の未回転因子の構造を示す第1図の第1象限には反ソ, 反中共, 反中共人と, 共産主義国家への反感, 革命への否定的態度等, 明らかに反共的態度と推定させるものが点在している。これに対して, 第4象限には共産主義の肯定, アメリカならびにアメリカ人への批判, 天皇制への否定等, いわゆる急進の態度がクラスターしている。この2つの対極は疑問の余地なく反共と容共, 保守と急進といえるものである。第1因子の影響を除去した第2因子において, はじめてこの双極性

因子が得られたのである。このことは, 男子学生の場合には, 急進—保守の軸が, 基本因子になりえぬまでも, 二次的にはかなり整序されて存在していることを示している。

なお, 念のため, 第1象限と第4象限内のクラスターの合理性についてさらに検討してみよう。第1象限内には戦争を肯定する態度がみられるが, この態度が反共と共存していることは不合理とはいえない。自由陣営を賛美する人はしばしば積極的な軍備拡充論者であるからである。ただ, 興味深いのは愛国心を賛美しない態度がこの反共の態度クラスターの中にあることである。アメリカの反共はナショナリズムと結びついていることは有名な事実であるが, この公式はわが国の男子大学生には該当しない。アジアの反共が民族主義

第3図 態度的因子の布置(男子) —rotated factor—



とどう結びつくか、その微妙さの一端がここにもでている。

この象限には pro 親, pro キリスト教もあるが、保守的な人はやはり親に好意的、宗教にも賛美的態度をもつのであろうか。

いずれにしろ、第1象限の態度変数群には大きな不合理はなく、まず統一性をもっていると考えて差支えない。

第4象限の態度変数間にも大きな矛盾はなさそうである。共産主義を信奉する人間が再軍備反対の立場にあるのはわが国の常識であろう。進歩的態度が男女交際に積極的な許容を示すのは、自然であろう。天皇制への強い反対はその世界観からして当然である。

結局、男子学生の場合には、第2因子においては、急進—保守の双極性因子を確認するのである。

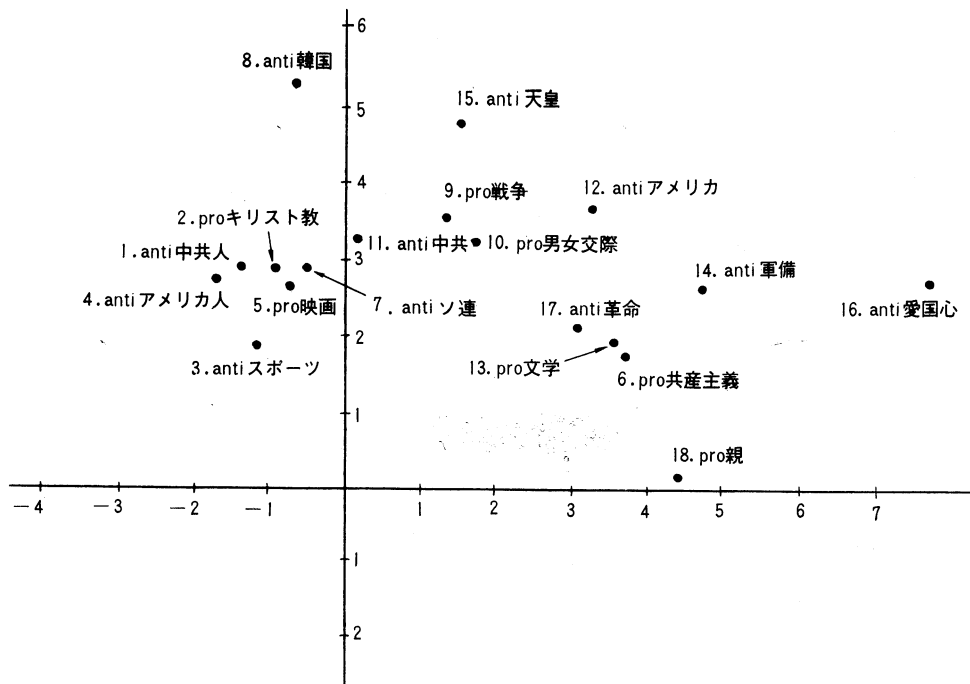
なお、第3図は第1因子と第2因子を 60° 回転した回転因子の座標である。この程度のクラスターなら、未回転因子で十分であろう。

次は女子の場合をみてみよう。

女子も男子同様、第1、第4象限にクラスターがみられるが、男子とちがって女子は、かなり複雑な内容をおびている。第1象限にあるものをひろうと anti ソ連, anti 中共, anti 中共人があるかと思うと、anti アメリカも存在する。pro 戦争があるのは男子と同様であるが、anti 天皇がこの中にあるのはどういうことであろうか。anti スポーツもはいっている。反共もあるし、反アメリカもあり、天皇制への反対もともにあるというのではどうにもならない。そこから一貫した原理を見出すことはとうてい不可能である。

このことは、第4象限についてもいえる。容共=反米は理解できるが、anti 革命の共在は特異

第4図 態度的因子の布置(女子) —rotated factor—



である。女子学生にとっては容共が直ちに革命への賛美とつながらないようである。anti 軍備がこの象限にあるのは自然であろう。女子の場合、anti 愛国心、即ち、インターナショナリズムが容共のこの象限にきているのは男子学生との大きなちがいである。いいかたをかえると、反共＝ナショナリズムでこの点に関してはアメリカならびに日本の一般の常識と一致している。

結局、女子の場合には、第1象限、第4象限の中の態度変数が一貫した原理で整序されていないのがその特徴といえる。しいていえば、第4象限が容共、急進の態度でまとまっているようであるが、その対極にある第1象限内の態度変数群に統一性が保たれていないとなると、これらを保守—急進の双極性因子と確定することはできない。

なお、第4図は女子について第1、第2の重心因子を60°回転して得た坐標である。この図と未回転因子の構造図である第2図と比較すると明らかなように、未回転因子の方がより解釈が容易で的確である。

要するに、女性については、その社会的態度の構造に関して、第1因子の基本因子についても、

第2の双極性因子についても、すっきりとした論理的基盤を見出しえなかったのである。敢ていうならばあいまい性と非イデオロギーが女子学生の構造特性といえる。アメリカの女子学生は男子学生より一貫性に富んでいたとする Diggory の報告とはかなりちがっているのが日本の女子学生といえるのである。

ただ、女子のこのような特徴についてはちがった観点からの説明も可能である。女子学生の態度構造のあいまい性を態度の認知的側面、情緒的側面から考えると、そこにはかなり興味深い問題の示唆がある。知的に了解しながら、情緒的には肯定できない複雑な態度。そのために生じる矛盾した態度は特に女性には多いと推定される。共産主義に賛成しながら、革命に反対する態度、天皇に反対だが、ソ連にも反対という態度構造なども1例であろう。Smith, Bruner, White,⁷⁾ のいう態度のもつ「社会的適応」(social adjustment)の機能、Katz⁴⁾ のいわゆる「功利的機能」(utilitarian function)の概念はこうした事例を説明するためのものである。現代の大衆社会の中では、人々の同調傾向は高く、常に「他人志向型」

の行動様式を生み出す。女性は特に多くの人によって採用されていると考えられる考えを、自分の意見に採用することにより、その効用を得ようとする。こうした説明は、女性のあいまいで矛盾にみちた態度構造の原因を適切に描いたものではないだろうか。(cf., 2)

いずれにしても、女性の態度的構造に関する限り、その構造化は男性より弱いし、それ故、特殊の意見についてはたえず、移動がきけられないというのが、この調査の結論である。このことはわれわれに態度構造の研究には性差が十分考えられねばならぬことを示唆している。

1949年調査との直接的比較は、その研究法のちがいのためできなかった。それ故、1949年調査では進歩—保守、国家主義—非国家主義の2次元を見出したが、この調査では一般男子を見出し得なかったという、大きなちがいについてはさらに多くの調査を介して検討されねばならない。

参 考 文 献

1. Diggory, J. C., Sex difference in the organization of attitudes. *J. Personality*, 1953, Vol. 22. No. 1.
2. Festinger, L. A Theory of Cognitive Dissonance, 1957.
3. 藤野武, 岡路市郎, 福島正治, 社会的態度の因子分析的研究, 北海道学芸大学紀要, 4巻, 2号, 1953, 1—30.
4. Katz, D. The Functional Approach to the Studies of attitudes, *Public Opinion Quarterly*, Vol. XXIV, No. 2, Summer, 1960, (下沢夫美子訳, 態度研究の機能的アプローチ, アメリカーナ, 8巻1号, 2号, 1962, 1—2).
5. 松山安雄, 青年の親に対する態度の測定, 大阪学芸大学紀要, 2号, 1—10.
6. 佐野勝男, 青年学生の「文学」に対する態度の測定, *心理学研究*, 20, 3, 1950, 27—32.
7. Smith, M. B., Bruner, J. S. and White, R. W., *Opinion and Personality*, 1956.
8. 田中国夫, 社会的態度の測定論的研究(I), *心理学研究*, 24, 2, 1953, 96—104.
9. 田中国夫, 松山安雄, 社会的態度の測定論的研究(II), —社会的態度における類型的因子について—, *心理学研究*, 25, 3, 1954, 174—180.